チ　ー　ム　：　まちに咲く花
メ ン バ ー ：　市ケ尾高等学校　牛島彩乃
　　市 ケ 尾 中 学 校　露口遥菜　太田千鶴
サ ポ ー タ ー ：　三田将司　高橋憲一
テ　ー　マ　：　グッズ制作を通した「なしかちゃん」および市ケ尾ユースプロジェクトの認知向上

■問題意識と活動のねらい

青葉区のキャラクターである”なしかちゃん”は、認知は高いものの半数は名前を知らない。
そこで、グッズ作成を通して、よりなしかちゃんおよび青葉区に愛着を持ってもらう。

■具体的な活動内容

【チーム結成の経緯】
・初回の集まりで、グッズ作成に興味がある２人の中学生（露口・太田）がグループになりました。
・２回目から初参加する高校生（牛島）がグループに入り、リーダーとしてプロジェクトを進めました。

【グッズ作成の経緯】
グッズをつくる、という漠然としたゴールがある中で、何のためにグッズをつくるのか、どのようにしてグッズをつくるのかを話し合いの中で深めていきました。大人のサポーター高橋さんは、以前ミュージシャンのグッズ作成を行っており、バンドやファンにとってグッズはどういうもので、どのように作成を行うのか体験談を話していただきました。その話を受け、中高生も自分の好きなアーティストのグッズや日々使用している文具などを振り返ったときに、「グッズは日常使いで愛着が沸くものが良い」・「グッズにはクラスＴシャツなど、一体感がうまれる効果がある」など、グッズ作成のねらいが明確になってきました。

【グッズの作成方法】
1. 大人の方と相談して、実現できそうなグッズを考える。
2. 話し合った結果、グッズとしてもらうなら何が良いかを区民祭で聞くことにする。
　⇒アンケート形式にして、自分たちで来場者の方に声をかける。
　内容はなしかちゃんを知っているか。グッズがもらえるなら何が良いか。
3. アンケート集計をし、多かったものから実際に検討をする。

なしかちゃんグッズ人気投票　アンケート集計結果

	小学生以下	小学生低学年	小学生高学年	中学生	高校生	学生	社会人
回答者学年	3	3	3	3	0	0	22

	名前も知っていた	見たことだけはあった	知らなかった	認知度
なしか認知度	18	7	10	71.43%
中学生以下回答	9	3	1	92.31%

	ペン	消しゴム	ノート	ファイル	メモ帳	ふせん	うちわ
希望グッズ	7	3	14	7	13	10	7
中学生以下回答	4	3	8	1	5	3	1
その他案	鉛筆削・キーホルダー・ぬいぐるみ・おえかき帳・ティッシュ・ステッカー・ホルダー・防犯ライト＆ブザー・シール						

4. “わっしょい”チームのスタンプラリーと協力し、景品に「ふせん」を渡すことに決定。
5.3 人でデザインを考え、発注をする。⇒スタンプラリー当日の景品交換時間にふせんを渡す。

■活動を振り返っての感想

・最初は中学生２人で話していたが、高校生の先輩や大人の方が話しかけてくれて、話せるようになった。
・区民祭で知らない方にアンケート協力の声をかける難しさを感じた。言葉だけで話しかけるのは難しいけど、アンケート協力依頼のパネルを活用し、小さい子にもわかりやすく！ 誰にでも話しかけやすくなった。
・アンケートを行ったことで、自分たちの目標であるなしかちゃんを知ってもらうことを実現できた。また、どのくらい認知度があるか確認できた。
・名前だけしか知らなかったなしかちゃんの誕生秘話を知ったり、性格を敢えてつけない理由を知れたり、グッズ制作を体験したり、なしかちゃんのきぐるみの中身を見たりと世界が広がった。
・限られた時間の中で物事を決めていく上で、期限に間に合うか心配だったこともあったけど、みんなの意見をまとめていって形にできてよかった。

■サポーターからの声

最初は絵を描くのが大好きな中学生２人、ミーティングもなしかちゃんのお絵かきで大半が終わる状態でした。ただ、そこに高校生の牛島さんが加わり、橋渡し役として引っ張ってくれました。その中で、中学生２人は友達にアンケート協力依頼や生徒会に交渉して回答依頼を行う・高校生はアンケート当日任せた２人の役割に対して、うまくいったことを褒めてフォローするなど、素晴らしい主体性とチーム力を発揮してくれました。少しの期間でしたが、中高生の大きな成長と可能性を感じることができて、本当に良かったです。

チ　ー　ム　：　絆 (きずな)
メ ン バ ー ：　市ケ尾高等学校　正津宏明
　　市 ケ 尾 中 学 校　大久保芽生　木村壮　津田有希　土志田優
サ ポ ー タ ー ：　関根秀昭　高峰雄　三田典子　早川幸江　早川幸男　横田英夫
テ　ー　マ　：　多世代の交流による地域の活性化

■問題意識と活動のねらい

地域社会において多世代間の交流が薄い。特に高齢化の進む地域に於いて高齢者をいかに活性化するかが課題である。
一方子どもたちは親と学校の先生以外に大人と接する機会が少ない。
中高生が教えるスマホ講習会を通じて、高齢者と子どもたちが学びあい、
交流を深めることで地域の活性化を図っていく。

■具体的な活動内容

あおば区民まつり 2017 にて活動内容についてアンケート・インタビューを実施（11/3）
　アンケート結果より「中高生が教えるシニア向けスマートフォン講習会」を実施する事に決定
講習会の宣伝、案内を実施（12/5 ～ 2/17）
　チラシの配布及び口コミで案内したが、チラシ配布は殆ど効果が無く口コミの案内が有効であった。
スマホ講習会を「ふれあい青葉」にて開催（2/18）
　講師：中高生
　受講生：8 名（年齢は 60 代後半～ 70 代前半）
　受講生のアンケート結果と主なコメント：
　　＊全員大変良かったという評価
　　＊子供たちに親切に教えて頂いて嬉しかった。
　　＊同じ様な講習会があれば又参加したい。
　講習会後の効果：
　　一生ガラケーを使用すると言っていた人がスマホに替えた。
　　ラインを使用した友達の輪を作った。

■活動を振り返っての感想

最初は高齢者の方と話せるか、コミュニケーションを取れるか不安だったが、優しく接してもらって楽しく活動できた。（中学 2 年生）
最初はなかなか話せなかったり、意見がまとまらなくて大変だと思ったが、ミーティングを重ねるたびに、会話の中で笑いが起きるほどになり楽しかった。（中学 3 年生）
お会いしたシニアの方が中高生と話すということだけでも嬉しいと喜ばれていたのが印象的だった。また、実際にシニアの方のお話を聞くことで、必要とされている意見は議論で出た意見と一致しないことが分かった。そこから、現場で必要とされる声を聞く必要があると実感した。（高校 1 年生）

■今後に向けたメッセージ

講習会のアンケートに継続的な実施をもとめる声が多かった。このような交流の場を継続するためには、中高生が参加しやすい環境が必要ではないか。今回は少人数であることや部活動・学校行事が活動のネックとなってしまった。また、全校生徒等への情報共有も必要である。これらを解決することで活発な活動、更に良い結果をもたらすことができるだろう。